

Sraffa と 価格理論

Roncaglia

月岡 大次郎*
2013年11月29日

第6章 『商品による商品の生産』と限界主義的方法の批判・克服

1

『商品による商品の生産』の分析対象は、生産価格体系とそれに対する分配変数すなわち利潤率と賃金の影響について。「生産規模および使用される要素の割合の変化から独立した経済体系の諸特性」に注視。

第2節では、限界主義の分析上の諸区別が『商品による商品の生産』に提示されたモデルに適用不可能であることを議論し、第3節では価値と分配の限界主義理論の方法論的基礎を吟味する。第4節では、前期ワイトゲンシュタインの理論と限界主義の立場の諸前提をさらに明らかにし、第5,6節では後期ワイトゲンシュタインにおいて限界主義的問題設定が逢着する諸困難について検討する。第7節では、「主観的」設定方法と「客観的」設定方法の平和的共存の可能性について論じ、第8節ではすらつふあとマルクスの分析に見られる限界主義との用語上の相違の裏に存在する問題設定の方法の違いから演繹することのできる若干の概念的相違を示して、本章で展開される分析の結論を述べる。

2

・『商品による商品の生産』に対して、生産とは対の消費を無視しているがために、「不完全」な一般均衡の体系の提示しているという見解。

→スラフファは部門間利潤率均等の仮定に基づいて決定される生産価格について分析。限界主義における需要と供給の均等を保証する「均衡価格」とは異なった問題。

・新古典派的な意味での部分分析について

→一般的な分析においてのみ完全な解決が得られる問題について近似的な解決を与えるために経済体系の一部に注意を集中しているという訳ではない。

・静学分析と動学分析新古典派の「静学理論」の特徴は、問題の変数に当該経済体系の均衡解とみなすことのできる値を与えようとする試みの結果、それらは無時間的な文脈のなかに置かれるという事実にある。

→スラフファは時間を抽象している訳ではないので、発展の一瞬を示しているものであると言った方が正確であろう。それは静学分析とは別のもの。

3

・スラフファの分析には限界主義の方法は適用できない

スラフファと限界主義的方法の相違は、限界主義学派における一般理論の研究、すなわち経済学を、それに比して現実に生じる諸問題は特殊な分枝でしかないような唯一の問題と

*東京大学大学院修士課程

同一視する考え方、そしてさまざまな特殊問題を解くことを可能にするであろう中心的な問題の解決方法の提案に求められる。

→限界主義者たちにとって、経済問題とは経済主体の「効用」の極大化である。問題の与件は、消費者の嗜好、技術、および資源の初期存在量である。これらからすれば、限界主義の理論のいわゆる一般性は、きわめてわずかなものに還元されてしまうものであることがわかる。

→消費者の嗜好は、それが説明しようとする現象から独立に認識することはできない。技術は社会現象総体の結果である。従って、それは限界主義者たちが分析の対象とする経済現象から独立していると考えすることは出来ない。

・限界主義が、消費者の嗜好と技術を所与として、経済主体の行動と価格の形成を説明しようとする事自体が問題なのではなく、むしろ経済学者の分析対象を極端にせまく考えるその見方を批判している。

4

・前期ウィトゲンシュタインと限界主義との方法との類似性。

→世界とわれわれが言語によって作り出す世界の像との間に対応関係があるというウィトゲンシュタインの考えは、現実と理論の原子論的基礎（「経済主体」および「財」）、世界の諸事実と言語（現実の合理的描写としての理論）の諸要素の間の対応、世界のうち描写可能なものはすべて一般的規則にしたがって完全に描写することができるという主張（新古典派の「一般理論」）に類似性がみられる。

5

・後期ウィトゲンシュタインの方法

→あらゆる命題は、それが使用される文脈とは独立に、合理的な言語の公理的秩序の中に正確な位置を見いだすことができるに違いないというウィトゲンシュタインが抱いていた考えは、誤りである様に思われた。

→その後、ウィトゲンシュタインにおいては、「語の意味とは、言語内におけるその慣用であり、しかもその語は現実の「単純な構成要素」に対応するものではないため、言語の一般理論を与えることはできずとし、「言語ゲーム」として（現実の言語の特定の側面に注意を集中した理想モデル）考えられるようになる。ここから以下の結論が引き出される。

諸命題を本質的に分析不可能な要素に分析する仕方は、唯一ではない。どのようなタイプの分析が有用であり、また有効な解明をもたらすかは、状況、検討対象の諸命題に関連する特定の問題に依存する

6

・スラッフアの方法は後期ウィトゲンシュタインの方法に依っているように思われる。与えられた問題（相対価格に対する所得の分配の直接的影響）に対して、その解決に必要なすべての要素を考慮し、そして、問題に最終的な解決を与えはするが、それが経済研究のすべての領域を占めるとする主張を持つことがない理論が作りあげられる。

・経済学を数理科学と同じ「科学性」の地平に置くということは、経済学の社会科学としての特質を忘れさせ、無益かつ有害な現実からの遊離をもたらす。発展や分配は数学的取り扱いに適さない。

7

- ・スラッファの理論と限界主義の理論との共存可能性について
- ・トマス-クーンのパラダイム転換

科学の発展は直線的ではなく、一連の時期に分割され得、各時期は完全に他とは異なった特徴をもつ。そこでの説明不可能な現象との邂逅によって危機の時期が経過した後、新しいパラダイムを基礎とした新たな体系の構築に移る。

- ・主観的次元と客観的次元の分析方法

前者（新古典派）は、希少性に分析を集中し、短期の現象、すなわち消費者の嗜好とそれらを満足するのに使用することのできる財の量が与えられたとき、需要と供給の均等を基礎として決定される市場価格の研究を可能にする。後者（古典派）は、長期の現象、すなわち生産価格の研究を可能にするという、両者の共存が可能だという主張について。

→反論

①限界主義的接近方法がたとえ特定の側面であれ、現実の解釈にとってはたして有用な理論体系を生み出したかどうか疑わしい

②両者の観点は、資本主義体制の作用様式に関する二つの異なった考え方に基づいている。古典派の「市場価格」は、限界主義経済学者の「短期の価格」とは違う。前者は市場で支配する現実の価格であり、需要供給以外の要因に影響されて生産価格からの乖離を示す。後者は、特別な条件の下で需要と供給の均等を保証する理論上の価格。

8

- ・スラッファとマルクスの理論は二者択一だという解釈は誤りである

→両者の理論の相違は分析目標の違いからくるものであって、それらの間に本質的に矛盾する要素が存在しないならば、その相違は両者の両立不可能性を主張する十分な根拠を与えるものではない。

- ・限界主義、スラッファ、マルクスの用語法の中に存在するいくつかの違い

①「交換比率」（価格）

- ・限界主義…分業が存在する限り、あらゆる歴史段階に妥当するとみなされる
- ・マルクスとスラッファ…「生産価格」は、価格の決定メカニズムそのもの、すなわち産業間の均等利潤率、各産業が交換によって自己の生産手段の補填を実現する価格の必要性から明らかなように、市場向けの商品生産と企業間の競争が支配する資本主義の歴史的脈絡の中での問題

②「経済財」「商品」

- ・「経済財」は社会形態の実現から独立した人間と自然の関係を示す
- ・「商品」は歴史的に規定されたもの

結論

スラッファとマルクスの問題設定方法と、他方の限界主義の問題設定方法との間には、埋めることのできない根本的な溝が存在。

それに対し、スラッファの理論とマルクスの理論の間には相違が存在するものの、それらの相違は両者を両立不可能な関係におくものではない。

第7章『商品による商品の生産』とマルクス主義の関係

1

①「ウルトラ・マルクシスト」からの批判の検討②マルクス理論に対するスラッフアの批判的貢献についての検討③「ウルトラ・スラッフイアン」についての吟味

2

「ウルトラ・マルクシスト」は、要するに、スラッフアはリカードのように資本主義の存在を前提し説明していないと批判。

→マルクス以降に書き、マルクスが展開した分析を基礎にして矛盾のない仕方で定義可能な諸概念を使って研究されたものについてはこの批判はあたらない。

3

・スラッフアはマルクスの価値の概念を使わないで分析を行っている

→価値と価格の関係について重要な貢献を行っている

・賃金財を非基礎財として扱っているという点。

→スラッフアの分析に労働力の概念を明示的に導入したとしても、その結果には少しも変わるところはない。その上、マルクスが問題にしたのは、労働力と労働の概念の混同。一方の欠如を問題としたのではない。

・スラッフアが生産諸条件を所与とするのに対し、マルクスはそのものの分析が課題となっている

→スラッフアは所与としているだけであって、技術の決定にあずかる資本家と労働者の社会的闘争などから独立に生産技術の発展が決まる、とは言っていない。

4

『商品による商品の生産』による、マルクス主義に対する二重の貢献

①資本主義経済のマルクス解釈に対抗するものとして発展した考え方、つまり限界主義の考え方の批判として、②マルクス主義理論における生産価格の決定とそれに関連した労働価値の生産価格への転化の問題についての助力となる

①について

「セイ法則」への執着の結果、スラッフアに「調和論的」資本主義観があるとする見解が生じる。リカード派がもっていた「調和論的」資本主義観はマルクスによって厳しく批判された。

・リカード学派は、投資と貯蓄の均等、貯蓄と利潤の均等を前提すれば、所得の増大は必然的に同額の消費財あるいは投資財の需要の増加に転化すると主張。それによって、総需要の不足による恐慌が一般的に不可能であると主張するに至る。

しかし、スラッフアによる古典派の生産価格の理論への復帰は、必ずしも「セイ法則」と結びつかないという理由によって意味を持つ。

5

②について

・スラッフアは、価値と価格が分析的に相互に独立した概念であることを示した。

・技術が与えられれば、一つの商品に含まれる労働量を決定することはつねに可能。

・問題は、価値と価格との関係についての意味と重要性。

6

